

共話する建築

建築は動くことはできないが、人の状況によってその働きが変わることはできないだろうか

対話する建築から共話する建築へ

現代建築においては対話型の建築が増えてきていると感じる。
しかしそれは、まだ人を固定的で受動的な存在に留めているように感じている。
そこで複数の話者が協働して会話をつくる「共話」という会話形式から、建築について考えてみる。
対話も共話もどちらも双方向性のある会話だが、共話にはどちらにも未完の開かれた状態があるのではないかと。

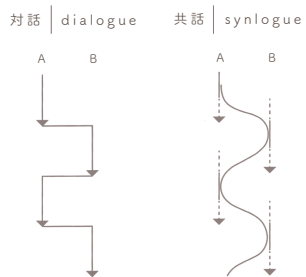
建築において完結しない断片的な部分である「空間エレメント」から成る建築を考える。
人はこの空間エレメントと共に補い合い助け合うことで建築と共話することができるのではないだろうか。
それには、空間エレメントとの関係や出会い方が大切であると考えられる。
そして完結しない空間エレメントと人の関係から、多様な共話を生む公共建築のための設計論を展開し提案する。

人と建築が対話を超えて共話するという事は、人が自分の身体や気持ちに気づき時間を過ごすことにつながる。



Architecture that creates "synlogue" environments for harmonious human-building interactions.

o1 対話と共話



対話

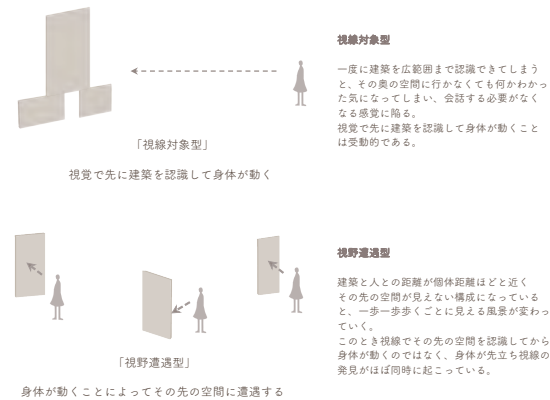
Aの話者が話し終わった後Bの話者が話し始める会話形式である。
文には主語があり、それぞれの主体が会話の中で混じり合うことがない。そのため、話せば話すほど他者と自分の存在が明確になるのが特徴。

共話

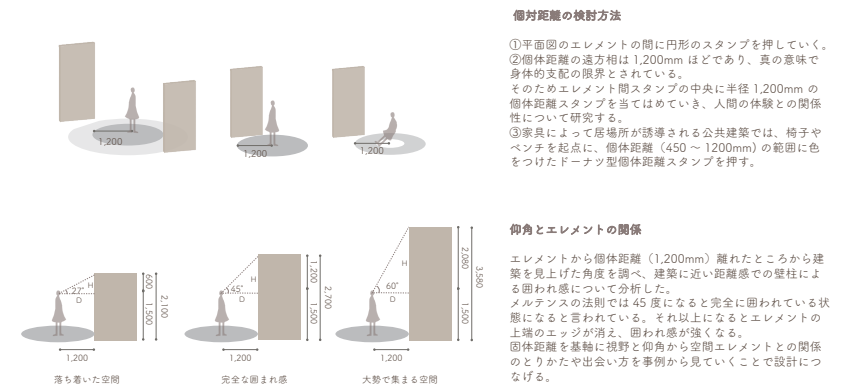
Aの話者が途中で投げかけた会話をBの話者が続けたり、途中で相槌をはさんだりして、協働して会話を紡いでいく会話形式である。
これは日本語によく見られ、文に主語がなくても成立し、話せば話すほど、自分と他者が溶け込み、新たな共同体ができていく。

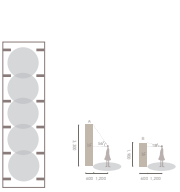
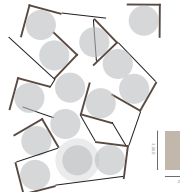
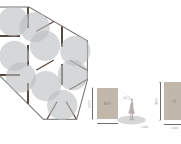
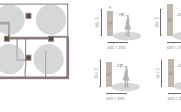
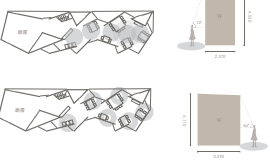
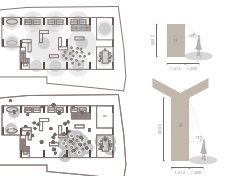

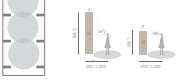
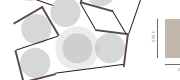

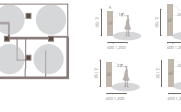
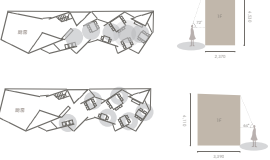
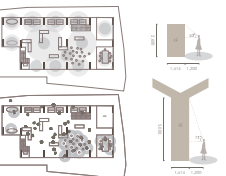

ドミニク・ペレン：「未来をつくる建築 わかりあふれあふれをつつため」、新潮社、p.163,2020年。

o2 空間エレメントとの出会い方



o3 空間エレメントとの関係



	那須の山荘	house I	house K	古澤邸	食堂の壁	YSP	Good Job! Center KASHIBA
平面図 (S=1,600/1,000/1,500)							
個体距離からの仰角 (S=1,600)							
壁と人の距離	個体距離	個体距離	個体距離	個体距離	個体距離-社会距離	個体距離-社会距離	個体距離-社会距離
見上げ角度	18-56'	52'	29-56'	18-39'	64-72'	40-71'	48-76'
幅	600mm	2750mm	1,600mm	400mm	2,100-3400mm	1,414mm	750-3,700mm
形・方向の均質性	幅・方向同じ/高さ異なる	幅・高さ同じ/方向異なる	幅同じ/高さ・方向異なる	幅・高さ・方向異なる	幅・高さ・方向異なる	幅・方向同じ/高さ異なる	幅・高さ・方向異なる
壁の素材	構造用ラージ合板	スライス連続	ラージアータ構造用合板	RC	ラージ構造用合板	CLT	ラワン合板
床・壁・天井の独立性	あり	なし	あり	なし	あり	あり	あり
構造の自律性	自律	自律	自律	自律	自律	自律	自律
人の自律性	自律	自律	自律	自律	自律	自律	自律

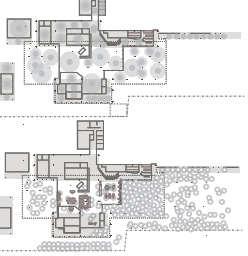
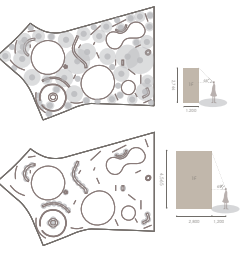
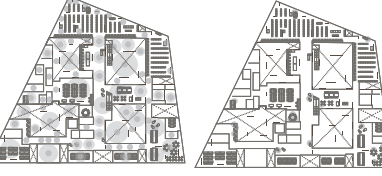
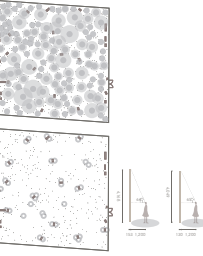
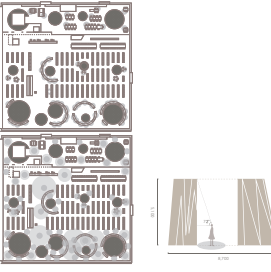
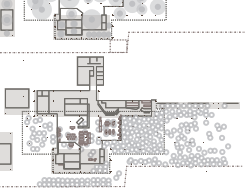
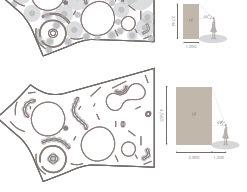
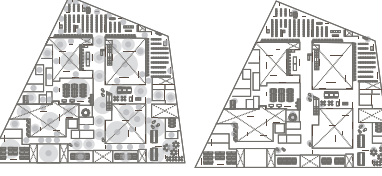
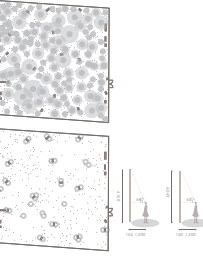
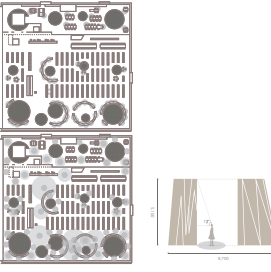
那須塩原まちなか交流センター くるる

軽井沢千住博美術館

えんぱーく 塩尻市市民交流センター

神奈川県工科大学 KAIT 工房

せんだいメディアテーク

	那須塩原まちなか交流センター くるる	軽井沢千住博美術館	えんぱーく 塩尻市市民交流センター	神奈川県工科大学 KAIT 工房	せんだいメディアテーク
平面図 (S=1,3000)					
個体距離からの仰角 (S=1,600)					
壁と人の距離	個体距離-公衆距離	個体距離-公衆距離	個体距離-公衆距離	個体距離-公衆距離	個体距離-公衆距離
見上げ角度	59-75'	44-69'	47-83'	64-69'	50-77'
幅	125/480mm	1,200-6,140mm	1,250/2,500/3,750mm	80-160mm	2,000-9,000mm
形・方向の均質性	方向同じ/幅・高さ異なる	幅・高さ・方向異なる	方向同じ/幅・高さ異なる	幅・高さ・方向異なる	幅・高さ・方向異なる
壁の素材	鉄骨	PB+EP	コンクリート打ち放し/鉄板張仕上げ	鉄骨	鉄骨(チェーン)
床・壁・天井の独立性	あり	なし	あり	あり	あり
構造の自律性	自律	自律	自律	自律	自律
人の自律性	自律	自律	自律	自律	自律

o1



Good Job! Center KASHIBA⁽¹⁾



個体距離 +1,100mm



house I⁽²⁾



個体距離 ±0

建築と人の距離

2つの建築はどちらも壁柱がばらばらと異なる角度で建てている。「Good Job! Center KASHIBA」は壁柱と自分の間の社会距離ほど離れているところは、視覚が身体よりも先行する視線対象型の体験が起きている。それと比較して「house I」は壁柱と人の距離が常に個体距離ほどであるため、視覚と身体の見方はほぼ同時に起こる視野通過型の体験が起きている。この分析から、同じ壁柱でも建築と人の距離感が近くなるほど、その先の空間が認識しづらくなり、視野通過型が起これやすいたことがわかった。そのため個体距離の最大値である1,200mmに近いほどその感覚は強くなると思える。逆にこれに近いと個体距離

o2



KAIT工房⁽³⁾



house K⁽⁴⁾



個体距離から有効視野で見える壁の最小値

建築の全体像の認識

どちらもエレメントとの距離が個体距離の場所がある。「KAIT工房」は、柱との距離が近く身体からまきまきするような場所も多くあるが、華奢で細い壁柱を用いているため、広い空間の奥まで見通せる。それと比較して、身体がすぼり隠れる大きな壁柱を用いた「house K」は奥まで見通すことができない。ここで個体距離から有効視野(4-20°)で見える壁の幅の最小値を求めると424mmであることがわかった。この値より幅が狭いと対象物の先の空間まで意識が届いてしまう。そのため視野通過が起きているには個体距離との関係で有効視野角から割り出した遮蔽度合いについて考えることが有効である。

o3



えんぱーく 3F⁽⁵⁾



えんぱーく 1F⁽⁶⁾



個体距離からの仰角

個体距離からの仰角

どちらも同じ「塩尻市市民交流センター」の壁柱であるが、間によって高さす法が異なる。3Fの壁柱の高さは壁柱による囲われた感覚がちょうど良く自分の身を委ねられる安心感があるのに対して、1Fの壁柱は仰角が80度以上あり、かなり見上げないと認識できないほどの高さのため、壁柱自体に圧倒され、建築と自分の主体の差異をより明確に感じたい。

o4



せんだいメディアテーク⁽⁷⁾




個体距離と椅子の関係

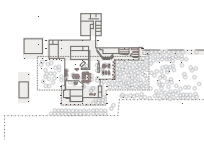
個体距離と椅子の関係

「せんだいメディアテーク」では、チェーンや前面のガラスから個体距離ほどの距離にベンチが置かれており、ここに座っているときは、建築や外の風景と自分が共にある感覚となり共感している状態だといえる。このように、スケールが大きい公共建築にも個体距離のスケールがあることがわかる。

o5



くるる⁽⁸⁾



群衆により生まれる距離感

群衆により生まれる距離感

「那須塩原まちなか交流センターくるる」では、日常と使われ方とイベント時の使われ方ではものや人の密度が多く異なる。イベント時の密度が大きいときは、人はものや他者だけではなく建築との距離感も日常の時よりも近くなるため、密接距離-個体距離の隙間が多く生まれている。このようにものや人の状況によっても空間の感じ方が大きく変わる。

o6



Good Job! Center KASHIBA⁽⁹⁾




house I⁽¹⁰⁾

建築と人の自律性

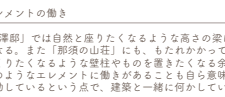
建築と人の自律性

建築と自分が互いに対等な存在として話するためには、互いが「自律した存在」であることが必要となるのではない。つまり建築のエレメントが、他に依存することなく自律して建っていること、そして人が主体的に行動できることによればじめて、互いに対等な関係で信頼を持って会話することができるようではないかと考えている。「Good Job! Center KASHIBA」の一部の壁柱は、構造として働いていないように見えるものもある。それと比較して「house I」は全ての壁柱は自律している安心感があり一つひとつのエレメントが自分の役割を持っているように感じた。

o7



古澤邸⁽¹¹⁾



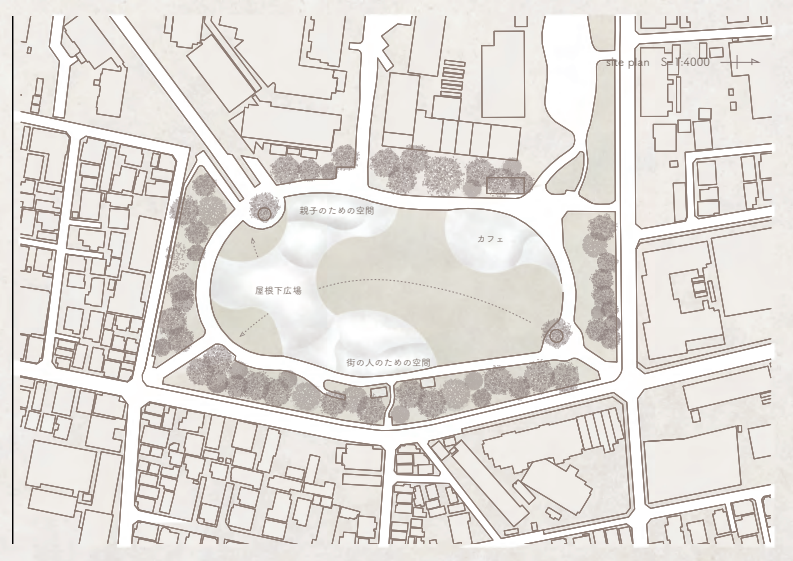
那須の山荘

エレメントの働き

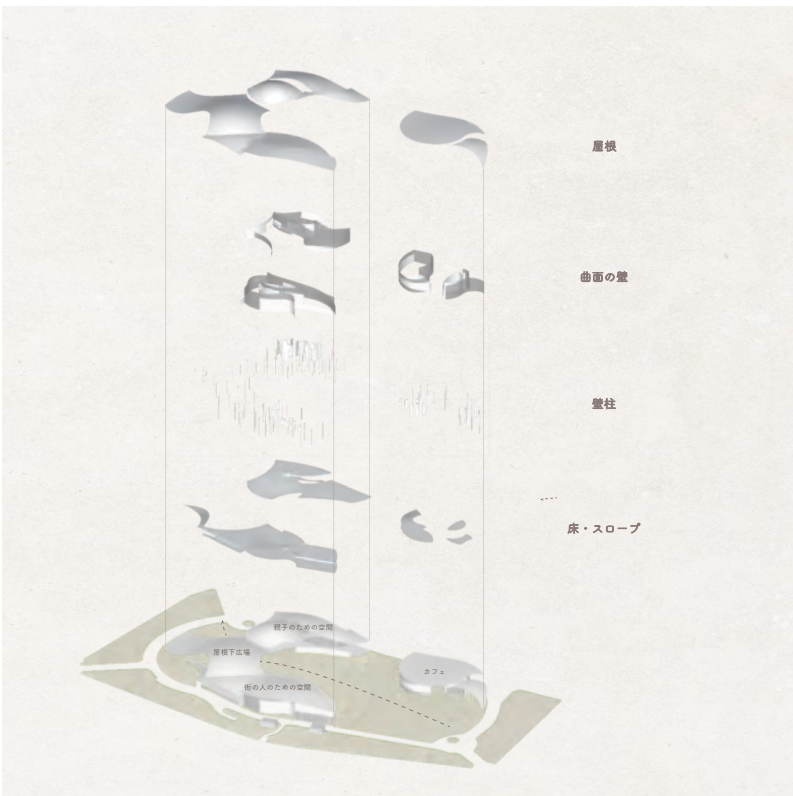
エレメントの働き

「古澤邸」では自然と座りたくなるような高さの梁に腰掛けたくなる。また「那須の山荘」にも、もたれかかって居場所をつくりたくなるような壁柱やものを置きたくなる余地がある。このようなエレメントに働きがあることも自ら意味を発見し行動しているという点で、建築と一緒に何かしている感覚がある。

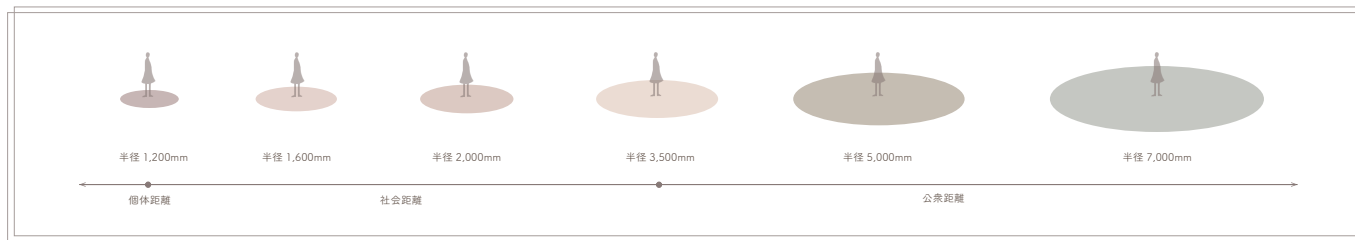
1. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 2. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 3. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 4. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 5. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 6. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 7. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 8. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 9. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 10. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022) | 11. 建築家: 藤野 浩一 (1957-2022)



敷地は東京都杉並区荻窪の市街地にある「桃井原っぱ公園」とする。
 この公園は広大な原っぱの周囲は複数の団地や住宅街で囲まれており、近隣住民との交流の場にもなっている。
 自分の思い通りに居場所を見つけて遊ぶ賑やかな風景が広がり、親子連れも多くいる。
 多くの人が自由に活動する既に魅力のある広大な原っぱであるが、そこに建築が建つからこそ新たに生まれる共話の可能性について考えたいと思った。

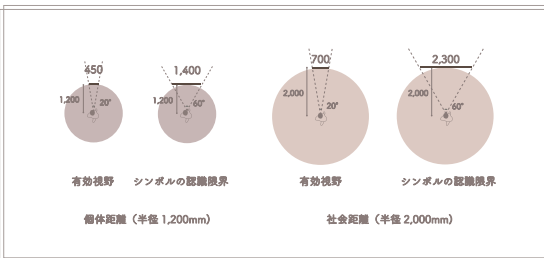


この原っぱに地域のための交流センターを設計し、公共建築における共話する建築を考えていく。
 広大な原っぱを残しつつ、住宅街側に街の人のための空間、団地側に親子のための空間、そしてカフェを設け、原っぱと連続するように屋根下広場を設けた。



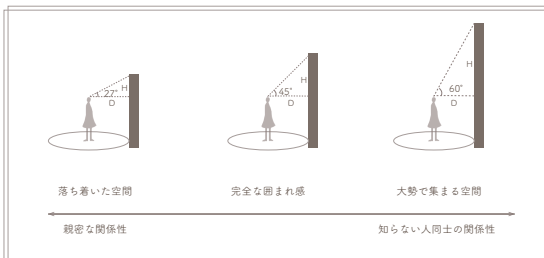
エレメント間スタンプ

公共建築では、ときとして個体距離以上の広い空間も必要である。
 調査では個体距離を軸にした共話について考えていたが、広い空間で共話を考えるために、個体距離から公衆距離まで幅広い大きさのエレメントスタンプを押していく。
 そしてその間に壁柱を立てることで、小さい空間と大きい空間の両方を併せ持った空間を設計する。



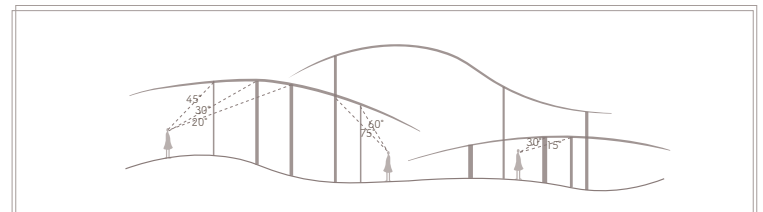
壁柱の幅

- ・壁柱の幅の最小値
 視野遮断する体験を起こすため、明瞭に対象物を認識する有効視野 20 以上を遮断する壁柱の幅を用いた。
- ・壁柱の幅の最大値
 大きな壁ではなくエレメントとして認識させるため、シンボルの認識限界とされる 60 度の視野角度から、壁柱の幅を用いた。



D/H を用いた距離と仰角の関係

- ・メルテンスの法則
 仰角が 45 度以上になると完全な囲まれ感となりエレメントの上端のエッジを感じなくなる。
- ・カテドラル効果
 天井の高さが人に与える影響のことである。天井が低くなるとより親密な関係性が構築され、集聚力が高まる。
 また天井が高くなると、創造的思考が活発になり、知らない人同士でもより長く一緒に居ることが出来る。



屋根と壁柱の関係

メルテンスの法則を用いて壁柱との距離と仰角を設計した。そして屋根や床を湾曲することで歩くたびに見え方を変化させ、人の心理状態によって様々な居場所を発見できる環境を設計する。

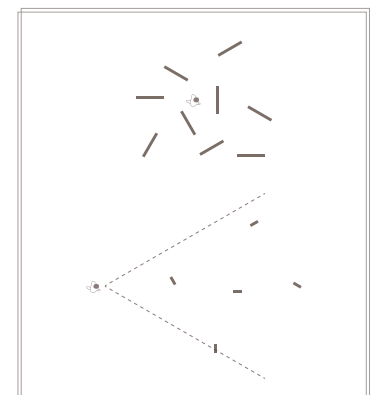
屋根の形状

下に向かって湾曲した形状の屋根にすることで、近づいたときも仰角が大きくなりすぎず、建築による圧迫感が少なくなる。



曲面の壁と壁柱の関係

- ・壁柱の密度が大きく変わるところに曲面の壁を挿入させ、混在しないようにする。
- ・壁柱との出会い方を誘導する。
- ・密度の高い壁柱を対象化しないために隠す。



壁柱の認識の仕方

- ・幅の広い壁柱
 囲まれ感を感じるように設計し、視野遮断が起きるようにした。
- ・幅の狭い壁柱
 壁柱を対象化できるようにし、近づいたときに共話生まれるようにした。

